

社団法人 神奈川県商店街連合会から「商店街幹部指導者講習会」と称して、1月半ばに案内状が届いた。講師は「早稲田商店会 安井潤一郎氏」とある。興味はあったが、講演時間はたったの1時間半で、負担金は24000円、箱根湯本で1泊、実質懇親会などというものであったので、行くことは考えなかった。開催日が2月9日にもかかわらず、1月中旬に案内状を送るような常識にも良い感じは持たなかった。関係者や過去の会長経験者は、この頃これがあることは知っているのだろうか、それ以外は急な案内となってしまうのだから。

さて「五体不満足 乙武洋匡（おとたけひろたけ）」という本がある。皆様ご存じであろう。妻が前に買ったのだが、私は読んでいなかった。本棚の前を通るとこの本が目にとまった。世間よりは大部分時間的には遅れているのだが、何気なく取り出し事務所に持って行って読むことにした。

読み始めて、中盤を過ぎると早稲田の「まちや商店会」のことがいろいろと出てきて、安井さんの記事も出てくる。ああ、安井さんとは商店会でこんな事をやっている人だなということがわかった。この本では、早稲田商店会（多分連合会であろう）には下記のような部会があることもわかった。

- ・ リサイクル部会
 - ・ バリアフリー部会（身障者や老人に優しいまちづくり）
 - ・ 震災部会
 - ・ 情報部会（インターネットなど、電子メールでやりとりしているとのこと）
 - ・ 地域教育部会（イベント開催）
 - ・ 元気なお店部会（活性化）
- 組織はその活動内容を表す。我々のところとは随分違うと感じた（本当は単に違うと感じているだけではないのだが）。

情報部会などがあるのだから、インターネットのホームページもあるのだろうと思ひ、ヤフー（最近5万円額面の株価が一時的とはいえ1億円を越えた会社）で早稲田商店会を検索してみた。商店会のページ自体は、あまり微細にはつくられていなくて店舗名+α程度だが、商店街連合会でホームページがつくられていることもわかった。関連のページを見てみると、安井さんの講演録が全文出ている。ちよつとのぞいてみると面白そうだが結構な量で、パソコンの上でのんびり見れる量ではなく印刷して読んだ。

当商店会や連合会で考えさせられるものも多く、少なくとも役員には目を通していただきたいと思ひ、配布することにした。多分、幹部指導者講演会もほぼ同じ内容であろう。

安井潤一郎講演報告
1999年6月23日・第138回都市経営フォーラム（日建設計主催）
（注意）このページは安井氏講演の報告として、主催団

体のホームページをそのまま引用しています。以下引用

第138回都市経営フォーラム ゼロエミッションからまちづくりへ 講師：安田 潤一郎氏 早稲田商店会会長

日付：1999年6月23日（水）
場所：後楽国際ビルディング・大ホール

“エコ・サマー・フェスティバル” 早稲田” 事始め
リサイクル運動の発展と商店街活性化
“いのちのまちづくり”へさまざまな実践
まちづくりの主役は誰か
自分たちのまちを自分たちでまもり、作る
フリーディスカッション

ただいまご紹介いただきました、新宿区にあります早稲田商店会の会長を務めております安井と申します。

きょう138回目の都市経営フォーラムに講師として出るようにいわれたのですが、正直いうと、最初はお断りさせていただきました。私は、こうやってしゃべって講師謝礼をいただく柄じゃないし、まして先生と呼ばれるような立場でもありませんので、本業もありまして、お断りしました。過去138回の講師の方たちの名簿を見せていただきました。何と商店会長なんてだれもいない。いわば私が最初。だったら、一度行ってみるかということできょうこへ来てしまつたんです。お集まりの皆さんの肩書等を見せていただいたときも、「こりや、来ない方がよかつたかな」と思っている最中です。

きょうは新宿区の出納長もお見えになっていきますので、地元でやっていること、あまり大きなことをいうと、それは違うといわれそうですが、私から、何かアカデミックなことをお聞きになろうとは、皆さん思っていないと思います。

実践しなさいわけです。だから、きょうは早稲田でどんなことをして、要するに、なぜこんなことを始めて、そして今何をして、これから先どんなふうになるというお話をさせていただきます。

“エコ・サマー・フェスティバル” 早稲田” 事始め

今、早稲田の町、早稲田大学とご紹介をいただきました。早稲田の商店会というところ、「ああ、あの早稲田大学のあるあそこですね」と、よくいわれる。あれは間違いなんですよ。うちの町にある大学が早稲田なんです。早稲田大学が真ん中なんです。早稲田大学が真ん中にあるので、その周りを7つの商店会が取り巻いておりまして、真ん中の早稲田大学は、我々は本部キャンパスというんですが、正確には西早稲田キャンパス。ここには学生が3万人おります。この周りを取り巻いている7つの商店会、そこに住んでいる地元住民の方たちが全部で2万3000人から2万4000人と考えております。

ですから、8月の夏休み、お盆過ぎは町の人口が半分以下になってしまいます。商店会長になりますと、商店会のメンバーさんから「早稲田の夏は寂しいよ。夏枯れ対策を何かやろうよ」という話が来りました。商店会長と簡単にいうてしまいましたが、商店

会長になるにはなる理由があるんです。商店会長というのはなるうと思つたつてなれない。またなりたいやつはあまりいないんですけれども。商店会長になるには一応PTAの会長をやらなきゃならないという不文律のようなものがあるわけです。PTAの会長をやるにはこの町で生まれ育つてこの町の小学校を出てないとなりづらいうことがあつた。

私は早稲田の町で生まれて、早稲田の町で育つて、中学、高校が、早稲田中学、早稲田高校、大学は早稲田。ほかを知らない。親のやつていた商売の跡を継いでという形ですから、当然のように、私のところにPTAの会長役が来たんです。ただ、きょうお集まりの中には先生方もいらつしやると思うんですが、学校なんてのは親がガタガタ手をつたつてお返しする、先生に任せておけばいいんだというのが私の持論でしたし、卒業以来、自分の出た小学校の門をくぐつたのは、選挙の投票のときだけですよ。子供が2人おりますが、子供2人の運動会も授業参観も、何も威張ることはないんですが、行ったことがないんです。

学校は学校に任せておけばいい、先生に任せておけばいい、親はガタガタ首を突つ込むんじゃないといつていた私のところに、ある日突然PTAの会長が無い込んできた。地元の先輩に「安井、次のPTAの会長をおまえてやってくださいな」といわれた。「勘弁してくださいな」といふ。私のところは食品スーパーで年中無休で、実際問題、こんなことやっていられせんよ。次に校長先生がお見えになった。校長先生が「安井さんは、兄弟が4人、そして子供が2人、いわば6人がこの学校にお世話になった。お世話になった学校に恩を返すおつもりはございませんか」と、こういふんです。即座に「ない」と答えたんです。（笑）私のところに小学校から注文来ませんでしたから、思も何も感じてない。冗談じゃねえやと思つて、「ない」と答えた。そしたら、校長先生は帰つた。

次に来たのがPTAの役員さんですね。PTAの役員のお母さんが5人来て、うちの事務所まで、「安井さん、お願いします。やつてください。安井さんがうんといつてくれないと、次の入学式、PTAの会長なしでやらないとならないんです」。PTAの会長がいらない入学式も乙なものでいいんじゃないかと思つていたけど、「お願いします、お願いします」と真剣に頼まれた。でも私でできませんから、「勘弁してください」といって、お断りした。そしたら、その5人の中の1人のお母さんが、最後に、「こんなお願いして、受けてもらえないんじや、あしたから稲毛屋さんには買い物に来れないね」なんて、目くばせするわけです。人の心臓を握りつぶすようなことをいうもんですから、「ちよつと待ってください。やらせていただけませんか」（笑）といつて、2年間やつた。

PTAの会長を2年間やると、次に来るのは民生委員。民生委員が来ました。民生委員って何するのかわからなかつたら、ひとり暮らしの年寄りに紫手帳というのを配つて回る。あんまり格好よくないと思つたんで、「嫌だ」といつて断つた。次が保護司ですね。保護司を20年やると勲章もらえるといわれて、「勲章要らない」と断つて、最後に来たのが商店会長です。

まさかこんな早くになるとは思わなかつた。商店会、商店会と商店会の話がよく出ますけれども、ご案内の方もいらつしやいます。商店会ってどんなものかお話ししますと、昭和の50年代は配給という制度があつた。置いておけば物の売れる時代ですから、どれだけ組合から配給されるかによつて、きょう1日の店の売り上げが変わるんですね。八百屋は八百屋の、肉屋は肉屋の、魚屋は魚屋の組合活動を一生懸命やると、きょう配給が多目に来る。組合活動を一生懸命やることによつてのみ売り上げがアップするんです。ですから、組合活動をみんな一生懸命やつたんですね。しかし、昭和の50年代、真ん中過ぎには配給制度も終わり、50年代の初めから商店会活動が盛んになりました。小売店、商業店舗が集まっている商業集積としての商店会活動が大変盛んになりました。

しかし、昭和50年代の真ん中、大阪の主婦の店ダイエー、今の大手スーパーのダイエーがスーパーマーケットという業態を開発して、それが定着することによつて、商業集積としての商店会の使命は終わったんですね。しかし、昭和の50年代、現状でも商店会活動はある。それも仲よしクラブであるんです。物を売つたり買つたりするつき合いの商店会の中で仲よしという精神論が中に入つてきた活動を、いまだに日本じゅうでやっているわけです。この商店会の会長に私はさせられたわけです。

ただ、商店会会長になりますと、何をやらなきゃいけないのかということが気になりますので、いろんな人に聞いて回りました。今後、商店会というのは何をすればいいんだらう。そしたら、私にアドバイスくれた人の中で、「商店会というのはこれから地域活動だよ」といわれた。「地域活動」なんてのは、商店会の方向の中で、または定款の中等に1つも書いてない。地域活動なんてやるもんじゃありません。もつといつたら、地域活動、いわばまちづくり。まちづくりだとか、環境なんていうのは、きょうは行政の方が大勢さんいらつしやるといふことですが、そんなものは役所の仕事で、市民運動が自己満足でやつていけばいいというのが我々の物の考え方でした。

ですから、「地域活動、なんだ、それは」といふふうにして思つていました。でも、「物を売つたり買つたりする、いわば束ねやすい商店会」というのは、実働部隊となつて地域活動をやる。こうしなければ町はよくならないんだよ。お客さんというのはいわゆる出てくるものなんだ。汚いところには汚いものが、きれいなところにはきれいなものがわいて出てくるんだよ。だから、いい店をつくるう、いい町をつくるうと思つたら、自分たちできれいにする努力が必要なんだよ」といわれたんです。「ああ、そんなもんですか」と聞いただけで、私はそういう活動もしなきゃいけないのかなと思つていただけです。

これは商店会長になつて最初の年に、私があちこちで聞いた話の中の1つですが、商店会長になつて3年目、もうそろそろ自分で何かやってみよう。やりたいことがあるらうから、みんなのやりたいことも聞いてみようというところで、商店会の役員会の下に事業委員会というのをセツトしました。商店会の役員は、さつき申し上げましたように、会長なんて生まれ育つて、地元の小学校を卒業してないとなりづらいう。役員もそうなんです。

何しろ、みんながすごい、すごいって褒めるんですね。それはそうですね。ふだん、役所から何いわれたって、「うるせえな。忙しいんだ。やってられないんだ、そんなこと」といつていた、いうことをきかない商店会が、自分たちから環境だとか、何とかいい出しちゃった。いつているだけなんです。思ってもみなかったんです。(笑)補助金くれると思ったからいつてただけの話。そういう商店会が、「これはすごい、何か変わってきたぞ」と、みんないい方にいい方に理解してくれるようになってしまった。

みんながこんなに褒めるんだったら、反省会やろうよというんで、みんなが集まって反省会、まあ、1杯飲もうというところでやりました。お互いに肩をたたき合いながら「おれたちはすばらしい」とか、いろいろなことをいつていた。気分よく飲んでいたら、その中に1人、みんなが気分よくいつている中で水をぶっかけるやつが出てきた。早稲田大学の管理課長。

この管理課長が昔から仲が悪くてというんだったら、いいんですけど、昔から仲よしで、イベントの当日は自分でリヤカーを引張ってすぐ協力してくれた。いわば仲間ですよ。仲間が、みんな楽しくいつているときにけんかを売って来た。「3万人の早稲田の学生がいないつてきた。3万人の学生がいないつて早稲田の町で何やつたって平常じゃないんだということでしょう。そして、「再資源化できた、再資源化できたって、こんなものは1日だからできたんだ。メーカーさんが補助したからだろう。再資源化できたって、だれがどのコストで再資源化工場まで持つていくんだ。こんなものはただのイベントだ」と、こういつた。商店会だつてそんなにばかじゃないです。だから、ただのイベントだつてわかっているんです。もつといつたら、一番最初は早稲田大学をただで借りたといつただけの話なんです。やつていつるうちに補助金がつくから「環境」とつただけなんです。来年やるとも思いつてないんです。(笑)だつて、ただで借りたのは20年目で私が初めてですから。次の年もただで借りるやつが出てきたら、手柄が2分の1になつてしまつてか、いろいろなことを考えながらいつていただけなんです。

ただ、ただのイベントだといわれて、ムツとしますね。だつて、楽しかった。一生懸命みんなやつた。それを「ただのイベント」といつる言い方をされたので、ムツとした。でも、大学城下町ですから、管理課長は偉いですから、やつぱり少少イイシヨしないだめだ。「課長、そうおつしやいますけど、マスコミも来ましたよ」といつても、課長ニコリとも笑わず、「早稲田という名前がつけばマスコミは来る」、こういうんですね。これにはキレイ。それじゃ、学生のいつるときやつてやろうじゃないかということ、その年の2月に「早稲田ゴミゼロ平常時実験」といつる1カ月のロングラン実験をやつたんです。

リサイクル運動の発展と商店街活性化

我々が一番最初にやつたイベント、これは補助金ねらい。2番目の1カ月のロングラン実験、これはけんか越し。1つも褒められたきつかけではなかつたんですが、(笑)何しろやつた。2月の1カ月間、早稲田の町で、ちよつとした注意で、このちよつとした注意というのは分別ということ。我々は1日のイベントをやつて、

やつぱり集めてから分別する、分けるというのは無理だなということがわかつた。出すときに分ける、これしかない。

それと、もう1点、リサイクルというのは集めることじゃないなということに気がつた。リサイクルというのは使うことだということに気がつた。要するに、集めること以上に使うことが大切だということ。学習を商店会はしたんです。

しかし、我々商人はお客さんが買って帰つて得にならないものを売つてはいけません。では、お客さんが買って帰つて得になるもの、それはどこからスタートするのか。グルッと回つて集めるところに戻るんです。要するに、捨てればごみ、生かせば資源。この生かすというのは徹底分別だということ。商店会は学習した。ですから、このごみゼロ平常時実験、地元まいたB4の新聞折り込みチラシのテーマは、「ちよつとした注意でごみはどれだけ減るか」。分別するというところで資源になるわけですから、ごみがどれだけ減るか。「儲かるリサイクル、楽しリサイクルが可能かを、この早稲田の町で実験します」といつることをテーマにして、「早稲田ごみゼロ平常時実験」といつるのをやりました。

この2月の13日から16日までの中核の1週間を我々はコア期間と名づけて、全機種のフル稼働、すべてどのくらい入つたかカウンントをとろうということにしました。早稲田大学の周りの7つの商店会に空き缶回収機、ペットボトルの回収機を、計7台。生ごみ処理機の大型を4台、中型を3台、小型を5台。そして、段ボールの集団回収のステーションを町内2カ所。あと発泡スチロールができなかつた。そんなので、1カ月の中の1週間、コア期間をやつてみました。何とそのときに集まつた空き缶が1週間で2万4000缶なんです。生ごみは7トン。段ボールは数え切れないくらい集まりました。

何でそんなふうになつたのか。実は06年の2月から東京都は事業系ごみの有料化という施策を打ち出してきました。我々事業者がごみを出すときに有料シール、金をつけないと持つていかないよといつるとんでもないことを東京都はい出した。事業系ごみの有料化、何で家庭系からやつてこないとか、税金の二重取り、だれがこんなもの払うかとか、いろいろ役所には盾突いたんです。けれども、役所は一たんいい出すとやめませんから、やり始めるだろう。

我々シミュレーションをしてみたんです。ちよつと数字間違いがあつたんですが、一番最初に出たシミュレーション、町の喫茶店で月額4万円といつごみ処理費用が出たときには青くなりましたね。無理ですよ。商売やつていられないですよ。学生街の喫茶店で月額4万円。これは実は数字違いがあつたんですけれども、これは大変なことだ。これに対する対抗手段は何だといつたら、ごみ減量、リサイクル。リサイクルがこれのコストセーブに對抗する手段だといつことがわかつて来た。

だから、我々は空き缶回収だとか、生ごみ処理だとか、いろいろな形に商店会は入つた。我々からさういつる有料シール、コストをセーブするといつことは町が動くことになるんです。

それ以上に2万4000缶の空き缶が集まつた。そのもう1つの理由は、前回は特賞にリーガロイヤルホテルの無料宿泊券ペアチケットを1本出しましたが、今回はハワイ6日間お1人様といつチケットを2本出したんです。

す。金のない商店会がよく出すねといわれたんですが、これはもちろん商店会が出したんじゃない。トラベルネットといつ旅行代理店さんがこれを出してくれました。トラベルネットといつ旅行代理店は、東京コロンビーといつ社会福祉法人の子会社です。障害者、身障者の方たちの社会福祉法人東京コロンビーの子会社。じゃ、何でその東京コロンビーと我々のつき合いがあつたかといつと、実はその年の8月の第1回のイベントに戻ります。この第1回のイベントの中のプロジェクトにインターネットサーフィンといつプロジェクトをやりました。

これはコンピュータを30台借りてきて、それをネットサーフィン組んで、地元の子供たちに自分たちの手でインターネットにアクセスして、世界中の環境情報、リサイクル情報を取り出させようといつプロジェクトを組んだんです。聞いているだけですばらしいと思いませんか。アイデアは出したんですけれども、はたと困つたんです。だれがそれを指導するのかといつところ困つた。

私は早稲田の町の中では一番アカデミックなんです。私とコンピュータとは相当距離があるんです。といつことは私以上のこつち側はコンピュータとはいつと距離があるんです。いまだに電卓よりもそろばんを信じていつる連中がおりますので、こいつらにコンピュータといつたつてしようがない。どうしようかといつていたら、中華屋の出前と日本そば屋の出前が「会長、西早稲田に東京コロンビー情報処理センターといつのがあつて、車いすの人たちがコンピュータを使つて何かやつていつるよ。いつぱいいつるからあそこ頼めば手伝つてくれるんじゃないか」といつられた。東京コロンビーなんて名前も知らなかつた。そんなところがあるんだつたら、頼んでくるかといつことだつた。

語弊を恐れずに申し上げれば、私は、身障者、障害者、大嫌いです。身障者とか障害者は大嫌いです。買い物に来ればほかのお客の邪魔になるし、何かやつてもらふのが当たり前みたいな顔をしていつるし、ちよつとした言葉のあやでねじ込んでくるし、「体の弱いやくざ者」とか、いろいろいつてたんです。その大嫌いな障害者がいつぱいいつる東京コロンビーに行つて、こつちは頼み事をするので、素直にお願ひしますといえよかつたんですけれども、こいつら性格なものですから、どうしてても言葉がよくなくなつてしまつて、「根性悪くて何もしてない健康者とはつき合つてねえんだ」といつたら、東京コロンビーの連中は、ニコリ笑つて、「安井さん、普通でいいんですよ」。懐深いなと思つたです。

もつとびつくりしたことは、この人たちとおつき合いつて、活動を一緒にやつていつると、この人たちの能力の高さ、前向きさ、ポジティブさ、さわやかさ、これにびつくりした。

それともう1点。生まれついつての車いすといつ人たちはこんなになつないといつのはわからなかつたです。柔道の練習中、水泳の練習中、ちよつとした手術の麻酔のミスである日突然車いすになつた。ですから、私があつた車いすの生活になる確率は私が考えているより相当違ふといつことがわかつたんです。それと、「0センチの段差で身動きがとれない」といつことにも正直びつくりしました。

なおかつ、8月22日のイベントですから、夏の炎天下に車いすの人たちに長時間いてもらつと、命にかかわ

り合ひがありますよといわれた。皆さんはご存じかもしれませんが、私は知らなかつた。車いすの人たちの中には、頸椎損傷、脊椎損傷で体温の維持管理能力に欠損のある人たちがいつるといつことを私は知らなかつた。空調設備の整つたフルフラットなところでないといつ、この人たちは長時間の作業に耐えられないといつことを私は知らなかつた。でも、下手な健康者のぐちつぽい話を聞いているよりも、東京コロンビーの連中と話をいつていつた方が精神衛生上どんなにさわやかだつたかわからないです。

健康者だつて根性の悪いやついつるんです。嫌なやつがいつるんです。それと同じだ。さういつるのがこの東京コロンビーの人たちとおつき合いつることによつてわかつて来た。あつといつ間にホームページをつくつてくれ、奥会津の金山町のホームページもあつといつ間にいつつてくれた。

皆さんも車いすの方たちを生まれてからごらんになつたことがあると思いつます。大変だな、かわいそうだなといつ心の端つこのところに「使えねえな」といつる思いつは、皆さんお持ちかどうか、私は持つていつました。しかし、コンピュータといつこんな箱を1つ真ん中に置くだけで、この立場が逆転することによつていつりました。向こうがその目で私を見るよになつました。「使えねえな」といつ。(笑) そのうちかわいそうになつたといつ目になりました。ロじやいわなかつたです。あの人たちはやつぱり優しかつたです。

そのぐらいつに、コンピュータといつもので変わるんだな、こいつらいつるものがあることによつて仕組みが変わるなといつことを肌で感じました。それ以上、さつき申し上げたよつに、根性がよくて前向きでさわやかで、この人たちが町を縦横無尽に動ければ、町は変わるぞ、景気はよくなる。だから、バリアフリーなんです。我々の町のバリアフリーは障害者、身障者がかわいそうだから、バリアフリーじゃないんです。バリアフリーすることによつて景気がよくなる。町は変わるぞからのバリアフリーなんです。

そんなことは後でお話ささせていただきますが、何しろさういつる形で空き缶が集まつた。ハワイ6日間だけで集まつたんじゃないんです。商店会もいつるいつる知恵を絞つた。学生街の喫茶店はコーヒー1杯無料券といつるのを出した。

駅をおりると、無料のティッシュペーパー配つてますね。皆さん、歩幅の関係でもらつたりもらわなかつたりなさいつていつますね。歩幅の関係で「あ、要らねえや」とかいつていつますね。ちよつとど合つと手を出したりする。無料のティッシュペーパーはポケットに入れたとしても、居酒屋の割引券なんて、見て「何だ」と捨てていつるじゃないですか。まして、コーヒー1杯無料券なんて、全然魅力ないつ。

ところが、いいことをして、対価として出たものは使いつたいんです。町をきれいつにする活動といつことで空き缶とかペットボトルを入れるんです。その対価として出たコーヒー1杯無料券、これはどうしてもしつたい。大人だつて使いつたいんだから、子供なんかもつとです。子供が当つたりする。子供が町じゅうの空き缶とかペットボトルをみんな持つていつてくれちゃつたんです。早稲田大学の学生は大隈さんの銅像の下の植え込みにもぐり込んで、1時間も2時間もかけて空き缶きれいつ

にしてくる。ついに早稲田大学の構内から空き缶が1つもなくなくなった。町の中からもなくなりました。神社とか公園からも空き缶が1つもなくなくなりました。駅の前に置いてある自転車、あの自転車の前の買い物かごが空き缶入れみたいなになっていきますね。あの空き缶も全部なくなっちゃう。なおかつ、自動販売機の横についてる空き缶や何かを入れるごみ箱の中からも空き缶が消える。何しろ町じゅうから空き缶、ペットボトルは消える。子供たちがみんな集めてくる。

集めて当たったコーヒー1杯無料券、子供は使いたい子供はお父さん、お母さんにいうんですよ。「ねえ、飲みに行こうよ、飲みに行こうよ。」(笑) コーヒー1杯で3時間も4時間も粘る学生しか来なかった学生街の喫茶店にある日突然ファミリィが来る。お父さんがコーヒー飲んで、お母さんが紅茶を飲んで、子供はジュースとサンドイッチとケーキです。売り上げは上がる、回転はいい。おばさん大喜びです。私は実行委員長ですから、一応視察というか、調査に行く。「いかがですか。空き缶回収のシステムは」というと、喫茶店のおばさんは目を輝かせて、ニコニコ笑いながら、「会長、あれはずばらしい、町がきれいになる」といいます。あれはもうすでにね。売り上げが上がったというだけです。(笑)

「でも、コーヒー1杯無料のコーヒー50杯分は負担があつたんじゃないですか」というと、「キーコーヒーから50杯分の豆もらった」といっていましたが、負担はなかったようです。

人のうちの話をするだけじゃなくて、うちは食品スーパーです。うちから、伊藤園のウーロン茶1缶サービス30本というチケットを出す。そしたら、伊藤園のルートセールスが「社長、1ケース24ですから、2ケース出しますよ」。48本出してもらったんですけど、うちはケチですから、当たりは本しか出さなかった、8本裏に隠した。平均すると、8割の戻りですから、4×8=32、また裏に8本隠せる。イベントやって、「本伊藤園のウーロン茶がただで手に入った、儲かるサイクルだ」といったら、せこ過ぎるついでにわめきましたけど。(笑) そのせこいやつの上を行くやつが出てきた。これが雀荘のマスター。雀荘のマスターの出してきたチケットが、麻雀お1人様1時間無料というチケット。麻雀は1人じややらないですね。(笑) 1時間じゃ終わらない。それを1時間、それも1人だけというのを出してきた。

とんでもないやつがいるもんだと思ったら、その上を行くのが歯医者先生。歯の無料相談券というのを出した。おわかりにならないみたいですね。(笑) 説明します。ただは口をあけるところまでです。(笑) 虫歯を見つけた途端、患者になるんです。だって、そうでしょう。こっちは寝ているんですよ。向こうはとんがったものを持って「虫歯がありますよ。痛くなりますよ」といっているんですよ。「ああ、そうですか。ありがとうございますよ。よかった。近所の歯医者で直してもらいます」なんて勇気のあるやつは1人もいませんで、「お願いします」と答える。そうすると、歯医者先生は「保険、使いますか」なんていって、だんだん患者になっていって、この2人がすごいというので、総括集会するとき、早稲田大学の隈講堂の舞台上上げて、実行委員会から表彰状を出した。雀荘のマスターには、「文教地区でありながら、麻雀の無料券を出す、その勇気をたたえる」。歯医者先生には、「歯の無料相談券という究極の患者

募集法を編み出したその頭脳のやわらかさをたたえる」。2人ともちゃんとスーツ着て、壇上が上がって、表彰状をいただいて、一言「ごあいさつ」といって、マイクの前で直立不動で一言、「家宝にさせていただきます」と答えた。(笑) 町の連中大笑した。

ここなんです。みんなが大笑いした。これは遊び心なんです。町が動くキーワードというのは、儲かることと楽しいこと。儲かるというのと、耳ざわりが悪ければ、得することと言葉をいかにしてもいいと思います。得するというのは、金銭だけでなく、精神的にも肉体的にも得するということがあるんですね。ですから、我々の町の中では、儲かること、楽しいこと、儲かること、今得することと申し上げました。じゃあ、楽しいこと、何。楽しいことって、実は遊び心。遊び心というのは知恵なんです。知恵は知識の活用。知識という言葉が情報という言葉とイコールであるならば、実は99年0月の第一回のイベントから一貫したテーマ、これが我々の「自分たちの町は自分たちで守る」というテーマに重なってくる。

“このちのまちづくり”へさまざまな実践

「自分たちの町は自分で守る」というのは、自分たちだけでやるということじゃないんです。自分たちから動き始めたら、自分たちの力の足りなさ、自分たちだけでは無理だということがわかり、そこから行政、企業、団体、学校、PTA、いろいろな組織との緊密な連携の必要性を感じるだろうというのが、我々の一貫したテーマです。東京新宿区にある商店会、新宿区は何して、東京は何して、国は何を考えているんだという前に、自分が何ができるのかおうよということなんです。自分たちから動き始めたときに初めてわかることとあるよということなんです。

ですから、我々はこのために、いろいろな人たちとの連携、商店会、町が場をつくり、そこに東京都、新宿区、早稲田大学、そして先生、学生、地元PTA、地元町会、この人たちに参加してもらって、実行委員会を組織したんです。自分たちが場をつくり、そこに参加してもらった。

市民参加のまちづくりという言葉がよく聞かれる。もうこんな言葉はないんです。これから先は行政参加のまちづくりなんです。だって、自分たちが住んでいる町です。自分たちの住んでいる町をなぜ役所や他人にお願いするんですかということなんです。要するに、自分たちが場をつくり、そこに行政に参加してもらおう。

我々は今までの活動、99年から93年のこの活動の中で学習したことが1つあります。行政が最高に力を発揮できるポジショニングは側面支援という立場だということがわかりました。要するに、役所が先頭に立たないということなんです。

きょうは都市経営フォーラムということで、都市、まちづくりの皆さんが大勢いらっしやると思いますが、我々はこの活動を通じて、日本中の元気な町、元気な商店会との連携をとれるようになりました。そして、いろいろな町と友達づき合いをするようになりました。その中から1つだけわかったことがあるんです。元気な町に共通項が1つあったんです。この場というのは、問題が出てくると思うんですが、元気な町の共通項というのは、コンサルタントと企画会社が入ってないという

ことです。コンサルタントと企画会社が町に入っていない町だけが元気であり続けるんです。自分たちでやっている町が元気なんです。コンサルタント、企画会社を否定はしません。町の住民になったところはすばらしいと思います。しかし、コンサル、企画会社に振り回されている町で元気であり続ける町を私は知らない。

アーケードとカラー舗装でお客の増えた商店会を私は見たことないですね。舞台と照明を変えたって、役者が変わらないうい芝居なんか見れるはずないじゃないですか。舞台と照明変えて役者が変わらないういじゃないですか。目立つから、もっと笑われるぜっていう話を私はしますね。じゃ、どうすればいいんだ。役者の心根を変えただけなんです。役者の心の持ち方を変えるだけでガラッと変わるということが現実として起こっていると思います。

何でそんな生意気なことをいい出したのかといいますが、我々はこの一連の活動を通じて、ごみはごみだけ考えていても、結論、決着は迎えられないということもわかったんです。何でかといいますが、早稲田大学には3万人の学生がいるといいました。今早稲田大学には3万人の学生がいます。または人の家の扉の上のきれいに並べていって投げたりする、まめなやつもいるんですけど、ポーンとほうり投げられる学生の後ろから、早稲田大学の労働のおじさんが「そこは捨てるどころじゃないよ」というと、今の早稲田の学生は何で答えると思いますか。「おまえの仕事だろう」というんです。こんなのが3万人もいるんですからね。

この話をすると、早稲田大学の学生が「安井さんのころはどうでしたか?」「昔だから忘れちゃった」と答えるようにしているんですけど(笑)。実際問題、これを見てみると、環境問題の活動をしている人たちは教育に問題があるといいて、そこで終わってしまう、挫折する。我々の町です。すべてのことはリンクしている。だから、我々の活動はまちづくりという傘の下ですべてのことがリンクして動いているんだと我々商店会が学習し始めた。

さつき自分たちで場をつくり、そこに行政、企業が参加すると申し上げました。役所の人たちも大勢さんいらっしやますから、少しは褒めないとと思うんでいいですけれども、参加なさった行政の方たちはすばらしい能力をお持ちですね。平たくいえば、利口ですよ。1人1人は利口だと思えました。何で集まるとばかになっちゃうのかと、(笑) 素朴な疑問を感じるぐらい1人1人の能力は目を見はるようなものがある。

早稲田大学の職員なんて学者みたいですから。その人たちが集まって、何で早稲田大学も新宿区も東京都も大していい評価が出ないのか。これはその行政の担当者の人たちが自分たちの組織の中で、自分の持っている力の99%が根回しという形の中でそがれているんだという気がしました。

我々が場をつくりたい。我々のところに参加してください。すべての責任は商店会長が持たすといったら、行政の人たちの能力が弾け出てきた。要するに、役所に奉職以来99年間、この人の99年間の人的資源というのは、我々が推しはかれないぐらいのすばらしい人的資源を持っている。これがどどん町に流れてくる。「へえ、こんなこともできるんだ、あんなこともできるんだ」と

いうふう到我々商店会、町はびつくりしました。そんな活動の中の1つですが、教育に問題があるといわれたときに、我々は何をしたか。だったら、「親と子供の環境学習講座」をやろうとやっただけですね。日本じゅうに幾つあるかわからない商店会、その中で「親と子供の環境学習講座」なんてやる商店会は、うちの商店会ぐらいしかありません。そこで、「親と子供の環境学習講座」をやって、子供を人質に取って親を呼んで、子供のころからのしつけというのをびつとやっただけ。なかなか評判がよかったです。

きょうお集まりの皆さんの中に、お読みになった方もいらっしやるかもしれませんが、今大変なベストセラーの『五体不満足』の乙武洋匡という男の子がいます。ご存じない方には申し上げますが、この子は先天性四肢切断というので、生まれついて、両方のひじから先、ひざから下がありません。いわば上半身だけの子供です。この子が私のところに初めて来たのが、さつき雀荘のマスターと歯医者先生を表彰した総括集会ときです。

彼はそのとき早稲田大学の政経の1年生。彼の電動車がすというの、人の目線と合わせて話をしたいということとでちよつと高いので目立つんです。ことしの1年生の中には随分重い障害を持った子がいるなどというのは見ました。私も何回か見ました。しかし、口を聞いたことも話をしたこともありません。その彼がその総括集会とき、電動車をいすおきて、私のそばに来ました。私の腰より下にきて、私の方を見上げて、「安井さんですね」と声をかけてきた。この「安井さんですね」という言葉がすごくさわやかだった。何でこんなさわやかな声を出せるんだ。だって、生まれついて、両方のひじから先、ひざから下がありません。上半身だけ、生まれついて、かわいそうだ、かわいそうだ、同情し続けられてきた子が、何でこんなさわやかな声を出せるんだ。それに私は興味がありました。私は生まれついてずっと褒められ続けているんですね。それでもこんなに屈折してしまうのに(笑) 同情し続けられた乙武が何でこんなさわやかな声を出すのか。

乙武がいつてきたのは、僕も一緒にまちづくりをやりたいというんです。「ああ、すばらしいことだ。いいよ、一緒にやろう」とやっついていくうちに、「安井さん、僕じやなきやできないことがある」といい出した。この言葉がおもしろい、この言葉は大きい。「よし、乙武。『親と子供の環境学習講座』の一番最後に、『5分講師をしろ』」。乙武が、生まれてから講師という立場で話をしたのは、それが最初だったと思います。「町と心のバリアフリー」というお話をしました。

乙武を初めて見た小学校の低学年の女の子は泣くんですよ。かわいそうで泣くんじやないんです。おっかない、気持ち悪いで泣くんです。しかし、乙武が「5分話をすると、乙君といって、終わった後はまとわりついてくる。彼はそれだけのインパクトのあるお話ができる子だった。

乙武の「5分の話が終わって、私が当日集まったお母さんたちにいったのは、何で乙武に話をさせたか。「乙武が『僕じやなきやできないことがある』っていい出した。この言葉がきょう集まった子供たちの心の中に入ったら、『私じやなきやできないことがある、僕じやな

きやできないことがある』というふうになる。そうしたら、この町から自分たちの命を自分たちで縮める子は1人もいなくなる。その願いを込めて乙武に話をさせました」といったら、集まったお母さんたち、すごく喜んでくれた。

これには後日談がありまして、乙武が学校のそばをその目立つ電動車いすで動いていたら、向こうから小学校1年生ぐらいの子が4人ぐらい歩いてきたそうです。『五体不満足』の中にも書かれていますから、お読みになった方いらっしゃると思いますが、その4人ぐらい来た1年生ぐらいの子供たちが、乙武を見て「何だ、あれ、気持ち悪い」といった。乙武は生まれてからずっといわれているから、「あ、まただな」と思ったそうです。しかし、その中の1人の男の子が「いいんだよ」といったそうです。そして、すれ違いきまにも一言「いいんだよ」といってすれ違っていった。乙武はその「いいんだよ」という言葉の中に、「このお兄さんは早稲田大学だよ」という言葉が、「このお兄さんは早稲田大学の乙武君」といって、まちづくりをやった、僕たちと全く変わらないうんだよ、いいんだよ」という言葉の意味がわかった。ショックを受けたのは乙武です。生まれて初めていわれた。すぐに私のところに来ました。「安井さん、こんなことがあった」、興奮してしゃべった。「でも、いった子は1人だろう」といったら、「そうです」「でも、すべてのことは1人から始まる。語り続ける」。

彼はそれから子供たちと一緒に、町を探検隊、車いす探検とか、いろいろなことやりました。その活動が毎日新聞で大きく写真入りで取り上げられ、その毎日新聞の記事を見て、NHKのディレクターさんが「青春探検」という30分間の番組で彼を取り上げ、その青春探検を見た講談社の方が『五体不満足』を書かせた。今300万部とも400万部ともいわれております。韓国でもベストセラーだといわれています。

我々にはホームページがありますが、このホームページ、当然のように、乙武の住所も電話番号もEメールのアドレスも消してあります。運悪く、そこに書いてあるEメールのアドレスは私のだけが残っている。私のところに読書感想文が来るんです。「乙武君、格好いい、頑張つて」なんていうんだしたら、読み飛ばしますよ。読み飛ばせませんよ。「私の娘にも左手がありません。死のうと思いましたが、でも、本を読んで生きる元気がわいてきました」なんていうのを読ませられたら、やっぱりお返事書かなきゃならないんです。乙武はメールリングリストから外れていますから、乙武にそれは送れないので、プリントアウトしてFAXで送っています。

今彼のところには2万通の手紙が来ているそうです。すべて自宅の電話は留守番にして、FAXにしています。FAXのローンは5日間で必ず1本がなくなるというっています。テレビの出演後、講談社に用意した6つの電話はすべて鳴りつ放しだ。ですから、彼は去年の10月の11日以来在学中の講演はすべてお断りしている。「断ることないじゃない、やれば」といったら、1日で1年分が出てしまうということです。Eメールの講師依頼などで、私のメールアドレスに「乙武君に講師お願いします」なんていうのが来るんです。いつからおれがあいつの秘書をやらなきゃならないのか。(笑)けさ来たメールなんてひどかったですね。群馬の富岡のPTAの人が「乙武君の講演は忙しくて無理だといわれていますから、安井さんはどうですか」という、嫌な頼み方と思

った。(笑)絶対断つてやろうと思つているんですけど。乙武はあの『五体不満足』の中で、福祉とは何ぞやとか、障害とは何ぞやなんて書いてないんです。ごらんになった方はおわかりのように、僕は生まれてからこうやって育つてますというふうには、ごくさらっと、上っ面をなぞつた。その本が、あれだけいろいろな方たちにインパクトを与えている。

要するに、乙武1人ではできなかったんです。町が商店会の夏枯れ対策でスタートしたことによって、乙武の持つていくものが具現化できた。我々の持つていくことは決してむだでも何でもなかった。もつといえ、我々の持つていくことと乙武の持つていくことは全くイコールで結ばれるということなんです。

実は、まちづくりと変わっていきましたが、我々は6つの分科会で動いているんです。まず第1は、ごみ減量リサイクルです。リサイクル部会、次がバリアフリー部会、3番目に、インターネットによる情報共有化。これは、自分たちで場をつくり、行政、企業、団体が参加するということに話がちょっと戻りますが、我々町と一緒に実行委員会を組織したといいますが、我々町の商人は商売がありますから、夜の9時から始まる集まりはない。行政の方、企業の方たちは6時から始めて9時には帰りたい。時間的に合わない。どうしようかといったときに、インターネットのEメールで会議をしようとい出した。最初4人からスタートしました。最初4人からスタートしたメンバーリストが、今100人を超えようとしています。

インターネットの情報共有化、インターネット部会。その次に出てくるのが震災対策です。この震災対策という部会をつくった途端、東大の地震研のドクターがメンバーとして入ってきました。いわば町のシンクタンクができたんです。このシンクタンクにとつてみると、町は現場です。現場を持ったシンクタンク。

きょう三菱総研の方いらつしゃつてないようですか、いつちやいますか、商店会長の知恵を借りて三菱総研の方が来たんです。千葉市の事業系ごみ減量のオフアールを受けました。つぎましては、商店会のお知恵を借りたい。三菱総研、いわば日本のシンクタンク、日本の頭脳が聞きに来たと思つて舞い上がって、きつちり2時間半しゃべつて、「そうですか」といつて聞いていつてくれた。帰りにこんな封筒を私に渡して「些少ですが」といふ。なかなか気がついていじやないかと思つて、帰つた後を見たら、図書券が3000円入っていました。(笑)

去年の暮れは三和総研の方が来た。三和総研が、北海道、東北開発公社の人たち3人連れてうちの事務所に来て、「北海道、東北の地場産業が疲弊して、駅前商店会がガタガタです。この活性化について、安井さんのお知恵を借りたい」といふから、「だめだ」といつた。「うちの町見られてからじゃ、しゃべれねえ。うちの町のどろろが活性化しているか、見られた後じゃ、幾らおれがうそつきだつてしゃべれねえ」といつたら、「一応考えていることだけしゃべつて下さい」といわれたので、好き勝手なことをしゃべつたんです。そんな形の中でいろんな人たちが来るようになった。100人のシンクタンクが我々にとつては大変な財産になってきたんです。それ以外に地域教育という部会があります。そして最

後に、元気なお店という部会をつくりました。これはいろいろな町、いろいろな人たちが、いろいろな地域との連携をしていくうちに、日本中の商店会がみんな今ぐあいが悪いなということを見て、なおかつ、シャッターが閉まった商店会、その町で何が起こっているかということを我々は見てしまったんです。

まちづくりの主役は誰か

中心市街地の活性化というのが今スタートしていません。中心市街地の活性化、あれは郊外に大手量販店ができて、町の中の商人がみんなシャッターをおろしてシャッター街になつちやつたということです。あれは大きいのと小さいのが勝負して、小さいのが負けたということだけですから、別段大したことはない。別段大したことないんですけれども、そこから次に何が起こってきたか実は子供が荒れ出しているんです。子供の非行が増えていく。何でだと思つていますか。当然です。シャッター閉めた店のおやじが何ていいますか。「もうこの町はだめだ」といふんです。「もうこの町はだめだ」なんていう言葉を聞いた子供が、自分の町を大切にしますか。しません。自分の町を大切にしないことは、人を大切にしない。ひるがえつて自分自身を大切にしないんです。だから、荒れる。

うちの町の隣に、日本一の繁華街、歓楽街といわれる歌舞伎町という町があります。歌舞伎町というのは300メートル四方です。300メートル四方にやくざ者の事務所が60あるんですけれども、この事務所同士はみんな仲よしですから、抗争が起こらない。だから、警察権力は手の中に入れておかない。その話を地元の警察から聞いたときに、「ああ、あれは新宿警察だ、おれたちは関係ない」といつたら、我々の所轄は戸塚警察ですが、戸塚のおまわりさんが何ていつたか。「構成員はどこに住んでいると思つていますか」といふんです。「構成員は電車に乗つて来ませんよ。要するに歌舞伎町の周りに住んでいるんです。町に住んでいる皆さんがまちづくりという意識を忘れたら、警察権力を幾ら強くしたつて、町の治安維持ははかれないんです」といつた。

町の商人がいつまでも元気でいつまでも明るくしないで、町の治安は守れないということなんです。この町で生まれてこの町で育つて、この町でなりわいを立て、生まれても育たなくてもいいですけど、この町でなりわいを立て、この町で子供を育ててもらつたということに感謝する気持ちがあつたならば、次の世代に胸を張つてバトンタッチできる町をつくらなきゃいけない。この使命感に、早稲田の町の連中は目覚めたということなんです。

環境問題、まちづくり、そんなものは役所が仕事で、市民運動が自己満足でいつていつた町の間が何をいつ出したか。「環境つてどういう意味？」「環境つて身の回り、まちづくりつてご近所づき合ひ」といつた。自分のご近所づき合ひ、自分の身の回りを何で役所や他人に任せるとなつてきたんです。

うちの町では去年の9月の10日から商店会のエコステーションというのを開設しました。これは空き店舗対策です。5坪のスペースの店舗が空き店舗になりまして、商店会の空き店舗対策と散逸ごみ、いわば環境対策、この2つが1つになつて、商店会エコステーション、商店会情報発信基地1号館というのを昨年9月10日に開設いたしました。

これは空き缶回収機とペットボトルの回収機を置いて、町のみんなが空き缶とかペットボトルをそこに持つてきて、入れて、当たりのチケットで商店会の活性化をはかる、お客さんを増やすというのを目的とした商店会のエコステーションです。これが去年の9月の10日からスタートしました。

ですから、今うちの町で見ていただけのもの、ビジネスに耐えられるものって何というかと、商店会のエコステーションしかない。でも、もう1つだけあるとすれば、夜コンビニの前でしゃがみ込んで、ペットとツバを吐いている子供たちは1人もいないということです。我々にとつてまちづくりって何？ということ、まちづくりというのは大人が町を好きになることというふうには我々は定義づけできないと思つています。我々大人が町を大切にすることを思つています。ここから町は変わつてくる。劇的に変わつてくるのが子供たちです。

我々商人は小なりといえども、資本主義経済の下で生きていますから、儲からなくなつたら、やめればいい、つぶれるときはつぶれるんだと、過去軽々に発言してしまいました。しかし、我々がつぶれたらどうするんだ。我々がなくなつたら、我々から元気が消えたら、町から元気が消えて、子供が荒れるんだぞとなつたら、どうすればいいか。

しかし、まちづくりをやっていますといつたつて、お客さんは絶対増えませんが、うちは食料品スーパーですけど、「うちの品物はちよつと高い。ちよつと使い勝手が悪いです。ちよつとまずいんです。でも、うちの社長まちづくりをやっていますから」といつたつて、お客は絶対増えませんが、これははつきりいえます。いろいろなマスコミ、新聞に出たつて、テレビに出たつて、これまた客は増えないということもはつきりわかつてきた。現実問題、まちづくりをやっているからいつたつて増えませんが、でも、我々はつぶれちゃいけない、元気であり続けなければいけないということに、初めて謙虚にどうすればいいんだと人の話を聞けるということなんです。

郊外の大手量販店がお客をみんな持つていつた。それはそうでしょう。町の零細小売業と郊外の大手量販店、業態が違うんです。郊外の大手量販店というのは流通業です。100人いるうちの80人から80人の人たちが、これは欲しいというものを並べなければ採算の合わない業種、これが流通業。我々町の商人は100人いるうち、5人の人たちが、これが欲しかったのよということだわりの品物を置いておくだけで食つていつける、これが小売業。簡単にいいますけれども、今日本で一番大きいダイエーと町の中で一番小さな零細小売業は、間屋さんがみんな一緒なんです。要するに、町の小売屋が自助努力して勉強することがなくなつたんです。なおかつ、日曜も休む、祭日も休む。日曜、祭日を休んで客が来ないといつている。こんな部分帯の商人は当然消えてなくなるんです。

早稲田の町は一体感があつて仲よしとよくいわれているんですが、まずそこが間違っています。商店会に一体感を求めてはいけません。商店会は仲よしじゃないんです。我々にはよく役員会の中でよく話をしますが、我々の心の中にある言葉は何なんだ。自分の店さえよければいいんじゃないか、自分の店さえよきやいというのがみんな集まっているんじゃないか。自分の店さえよきやいなんだ、でも、自分の店をもつとよくしたいときに、自

分1人では無理だ。嫌だけど、嫌いだけど、隣のおやじと手を組む、腕を組むというところから本当の一体感が生まれる。商店会長になったんだから、みんなに頭を下げてお願いして、商店会の一体感を保とうとする必要もないと私は答えた。

新宿区には101人の商店会があります。101人の商店会長がいます。この101人、小学校、子供のころに、将来の夢はと聞かれて「商店会長」と答えたやつは1人もいません。もちろん私もそうです。商店会長なんてのは、やらされてるんです。やらされている商店会長だから、だれが人に頭を下げなきゃならない。頭を下げるのは、商店会の会員のみならず私が頭に頭を下げて、私は下げないんだと私はいっている。それで商店会としてはおつき合いはやめよう。うちの商店会はおつき合いの部分帯はやめて、自分の店にとってメリットのあることだけをやっていこうという事で今進んでいます。

実はうちの商店会は、大正2年、早稲田商工会からスタートしている由緒正しい商店会なんです。ご多分に漏れず、昭和の30年代後半から50年代前半をピークとして、毎年毎年会員店舗が減っておりまして。何と昨年1割増えた。できたばかりの町の商店会だったら、それはあるかもしれないけれども、我々のような商店会で今店舗数が増えているのは東京の中でうちだけじゃないですか。何でかという、この活動をやってる商店会の役員たちがみんな楽しそうに、おもしろそうにやっているからなんです。このこと一緒にやると何かおもしろいことがあるとさうだとみんなが思いました。

我々は30年8月のスタート以来、イベントに興味を持つなといっているんです。イベントは365分の1だ。我々はイベントに興味を持ってはいけない。イベントを通じて町がどう変わるかに興味を持つ。365分の364が大切なんで、イベントの1なんかどうなっているんだ。そういうと、せっかくやるイベントを失敗したらどうするの。町では失敗と書いて経験と読むといっている。失敗を恐れて経験を積まないと、知らないやつが増えてもつとおっかない町ができてしまうんだよといっている。

我々の活動の中でいろいろな学習をしたと申し上げました。楽しいこともいっぱいやりました。そして6月の10日からエコステーションもオープンした。7月の5日から東西線の早稲田駅をおりて5秒早稲田中学の正門横で商店会のエコステーション2号館がオープンしようとしております。考えてください。学校施設ですよ。学校施設に空き缶回収機とペットボトルの回収機を置いて、持ってきたお客さんにインセンティブを与えて、当たったチケットには生ビール1杯無料なんていうチケットを出している。中学校、高校の正門の横で生ビール1杯無料なんてのを出しちゃ。これは何か。環境と

いたら、これができる。今うちの店を出しているチケットをご紹介申し上げますと、「きょうのお買い物が出たことになるかもしれない抽選券、空くじなし」というの出している。ちよつと長ったらしいので、ご説明申し上げますが、空き缶を入れて、賞とゲームが始まり、当たり、稲毛屋賞というのが出る。そこに書いてあるのが、「稲毛屋賞、きょうのお買い物が出たことになるかもしれない抽選券」が当たりました。レジでこのチケットをお渡しくださいと書いてある。お客さんが買い物をする。3000円

お買い物をして「こんなのが当たったんですけど」といつて出す。そうすると、レジの担当者は「町をきれいにする活動に協力していただきまして、ありがとうございます。これが抽選券です」といつて、スクラッチカードをお客さんに渡す。お客さんはこする。特賞、きょうの3000円のお買い物はただなんです。どうぞお持ちください。1等賞、半額です。3000円ですけれども、1500円いただきます。2等賞、1割引、2700円です。3等賞、空くじなし、30円引きです。

これが始まる、何が起ころうと思えます。みんなきょうただになると思込んでしまおう。(笑)客単価が上がるんです。うちは食品スーパーですから、邪魔になるものはないんです。でも、お客さんこすって「また、3等賞よ。当たり入れてるの」といつて。うちの店長はサラッとした顔で「企業秘密です」と答える。「うん、そんなことばっかりいつて」。でも、お客さんがいつこり笑って帰る。このいつこり笑って帰るというところから実はコミュニケーションが始まるんです。うちみたいな食品スーパーはお客さんは一言も口を聞かなくて買物できる。口をきかない、笑わなくても買物できる。その店でいつこり笑いながら、「本当にしよるがな、いんから」なんていついながら、進んでいく。このいつい形の中からコミュニケーションいつてできるといつうんです。

このいつい集まりで、昔の商店会を皆さん懐かしいつてお話しいただくことがあります。行政の方たちの集まり、市民運動の方たちの集まりで商店会の代表として行く。昔の商店会はよかつた、よかつたといふふうなんです。本当によかつたと思えます。皆さん。私は昔の商店会なんて買物しやすかつた絶対思いませんよ。昔の商店会ではコミュニケーションがどれていた。本当にコミュニケーションとれました。私は魚屋のおやじさんておつかなくて口聞かせませんでしたよ。八百屋のばあさんて荒つばいばかりで1つもおもしろいと思わなかつたですね。魚屋のおやじに「この魚新しい」なんて聞いた途端、どんな目すると思えます。(笑)これはいつけないと思つてよいつしよして、「どこでとれたの」なんていついと「海」なんて答える。八百屋のおばさんに「このみかん、甘い?」といつたら、何ていつと思つます。「食べてないからわかんないよ」なんていつ。そんなことをいつているから大手量販店に負けたんです。

我々がこれから先やらなきゃならない商店会といふのは、昔の商店会とは違ふんです。我々がやらなきゃならない商店会は、これからの新しい商店会。これは何か。有店舗による無店舗販売というものに進んでいかざるを得ないと思つています。これはこれからおいおいろいろんな形で皆さんのお目にとまると思つます。マルチメディア、コンピュータといふものが町をどう変えていくかおもしろい実験が出てくると思つます。

話があちこちいつて申しわけないんですが、「商店会がこんなことをいつて本当に儲かるの」と、よくいつわれるんです。儲かるんです。4月、5月の2カ月間に、早稲田の町に修学旅行のグループ研修で、田舎の中学校の子供たちが来たんです。うちの町に修学旅行が来たんです。うちの町には水族館も、美術館もないんですよ。日本中の行政が箱物行政して、ピービーヒーヒーいつていつるこの世の中で、早稲田の町は、みんな口裏合わせて、

ごみだとか環境だとかいつていつたら、修学旅行が来ちやつたんです。

早稲田の町に修学旅行が来て、早稲田大学を案内して、早稲田大学の先生に、町と大学が一体となつた環境対策なんていつ説明してもらつて、説明する前に、中学生に、めちゃくちゃ偉い先生だとか、思いつ切りすり込んどくと、田舎の中学生たちは純真ですから、そんな偉い先生の話をこんなに間近に聞けて、僕たちは幸せ者だ。それで早稲田大学の一番新しくできた「F号館といふのを見せる。「すげえな、大学いつて」といつ。6階にある学部共通端末室、100台のコンピュータがダツツと並んでいつすばらしいコンピュータルーム、最新鋭の機器がいつつばい並んでいつる。それを外から見ると「ウエーッ」、田舎の中学生が目を飛び出さるにいつつくりする。商店会をいつてエコステーションに行つて、商店会のエコステーションの中で空き缶回収をやる。商店会を歩くときに、我々はいつていつうか。「3年たつたら、来いよ」と声をかける。子供たちはうれしいつて涙を流す。と、我々は思いつ込んでいつるんですけども。(笑)

いつていつううちに、「早稲田はすごい、早稲田の町で勉強したい。早稲田大学に行きたいと思いつ込むやつが何人か出てきたらいつめたものです。今1つの学部をいつけるのに3万5000円かかりますから、みんな大体3つぐらいつ受けますから、10万5000円、学校が用意するのは紙3枚ですから、相当儲かる。ことしは広末涼子といふ女の子が早稲田に来るといつので、7年ぶりに受験者数は前年をアツプしたといつていつますが、あれ、うそですよ。広末涼子といふ女の子の教育学部の国語国文はいつ増えていつ。減つていつるんです。増えている学部はどこかといふと、まちづくり、環境対策、環境関係の学部が増えている。だから、早稲田の大学は我々町の商店会に向かつて足向けて寝られないつです。でも、周りに7つあるから、どつち向けていつかわからないだろうと思つていつます。(笑)そいつい早稲田の大学と町とのかか万りの中でいつていつります。

遊び心といいつましたが、今のエコステーションの中で出ていつるチケットに、町と大学が一体となつた環境対策を記念して、早稲田大学総長奥島孝康先生直筆色紙プレゼントといふのを出している。もう1つが、行政と町が一体となつた環境対策を記念して、新宿区長小野田隆区長直筆色紙プレゼントといふのもしいつているんです。

これはいつしただけいつや、遊び心にならないつですから、我々は区長秘書室、総長秘書室に内緒で、そのチケットの一番下に、「色紙の要らない人、500円のお買い物券と交換」といつ書いてある。(笑)それがいつたときに総長秘書室は怒りましたね。「うちの総長の色紙が500円?」といつたんです。区長秘書室も「安井さん、あんまりだ」といつるんです。私が両方にいつたのは「1000円だつたら、だれが色紙なんていつつていつか」。総長とか区長をいつやつておもしろいといふのは、我々町しかないんだよ。この遊び心が町を動かすことなんだ。この遊び心がいつわらない区長は、4月25日の選挙のときにいつつちり話をいつよういつやないかといつたら、区長から直接電話があつて、「どういつつていつたいても結構です」。(笑)今でもいつていつます。

ただ、冗談にならなかつたのは、だれ1人色紙持つていつかないといふのはいつ困つた。みんな500円のお買い物券になつちやつて、冗談にならないつていつるんです。

そんな形で、町では儲かること、楽しいこと、そして人が集まることをいつていつます。

自分たちのまちを自分たちでまもり、作る

震災対策、きょうはまちづくり、都市計画ですから、1つだけお話しするのは、町と大学が一体となつた震災対策。空き缶パーンと投げ捨てる。「おまえの仕事だろ」といつる学生が3万人いつる。この3万人の学生も、我々町の商人といつつてみれば、お客さんですから、メリットがあるんです。ところが、うちの隣のマンション、向こう側のアパートに住んでいつる人にとつてみれば、近所に大学があることに対してのメリットいつて実は何もないんです。長いこと、早稲田に住んでいつますから、おたくの息子を入りやすいといふにいつておきますなんて絶対いませんし、ましていつ月謝を安くいつておきますなんて口がさけても、あの大学はいつません。そういつると、近所に大学があることに対してのメリットがない。町の住民にとつて近所に大学があることについてのメリットをいつたさせよといふことで、いつまったのが、大学と町が一体となつた環境対策です。

これは前段があつたいつて、早稲田大学の震災マニュアルといふのをいつ私いつていつました。この震災マニュアルはいつていつていつたかといふと、第1番目にいつていつたのが、「学生を安全に学外退去」いつていつていつた。これは大学の中で学生にいつ死なれるといつ倒れないつといふこといつていつう。

町の一時避難場所は大学になつていつりました。(笑)3万人が出て、2万5000人がいつる、ただそれだけなんです。この担当セクションは管理課長です。けんかした管理課長がこのセクションですから、これはいつめたと思いつて、「もう3万が出て、2万が入る、真ん中で折り重なるようにいつ死なね。あんた業務上過失致死、担当常任理事もいつ一緒、即日バクられる」といつたら、管理課長が顔色変えて、町と大学が一体となつた震災対策をいついつた。

商学部の3年生の何々クラスは西早稲田1丁目地区のおいじいさんをいつける、おばあさんいつ担いでいつ逃げるといつ具体的なのいつ自主防災です。でも、これいつや無理なんです。山田さんのおいじいさん、田中さんのおばあさんいつやなきやだめなんです。でも、もつといふと、山田さんのおいじいさんはいつ足がいつ悪くなつた。田中さんのおばあさんはいつがいつ自由にいつなつたといふことがいつわらないつれば、いつけらないついんです。だつて、震災がいつこつたときにいつまずいつ自分の家、そこに3万人の学生、3万人全部いつやないつても、1万5000人、または1万人の学生がダツといつ出ていつる。

その震災弱者のマップ、我々の持つていつる情報を学生さんたちにいつ渡すと、ダツといつ出ていつていつける。こいついつ形の中からいついじいさんがいつ助けいつ出され、おばあさんがいつ担いつ出されるといつ具体的なのいつ自主防災をいつるといふことがいつ動きいつ始めていつる。こいついつることによつて、早稲田の町はいつ震災対策、安全な町にならうといふこといつていつる。

もう1点、我々のメリングリストのメンバーにいつ東大の地震研のドクターがいつるといついつました。このドクターがいついいつ出したのは、震災時の倒壊家屋診断をいつりまいつうといふことなんです。「安井さんのお店のいつ特売のいつチラシ。これはB4で月に3回いつらいいつ打ちまいつ。そのB4のいつチラシの裏、3分の1をごいつ提供いつただけいつますか」といつ

んです。「何」といったら、「そこに倒壊家屋診断申し込
みというのをくつつけて、それを稲毛屋さんのところに
持ってくるということで、早稲田の地区で1000軒を目
標に倒壊家屋診断をやると思うんです」というんです。
あれ、普通頼んだら3万円ですから、3000万のプロジェ
クトです。もちろんこれから先はプロの方をお願いしな
いと無理ですといいながら、早稲田の町で1000軒の倒
壊家屋診断ができたなら、今東京都で出している300メ
ートルメッシュの震災時のものよりもっと精度の高いも
のが出てくるんじゃないですか。

その中で、行政ではないえない、または研究機関では
えない、おまえの家はつぶれた、おまえの家は燃えたとい
うこととしてのシミュレーションも町が主体になれ
ばできる。そうすると、我々の町は住んでいて安心とい
う町になる。震災対策のシミュレーションも、町と大学
そして行政が一体となって進めていこうと今考えてお
ります。このキャッチコピーも私は考えたんです。あ
まり評判がよくないんです。何で評判がよくないかわ
からないんですが、総長に話をして「震災シミュレーシ
ョンのキャッチコピーを考えた」といったら、早稲田大
学の総長が「何を考えたんだ」というから、「グッラツと
来たら、待つてましたといえる町」といったら、(笑)「ほ
かのやつに考えさせなさい」といわれた。おれはいまだ
にいいなと思ってるんですが、何でおかしいのかな
と思ってる。(笑)

そんな形の震災対策、これから先うちの町はどどん
おもしろい方向に変わっていくと思います。
実は、12日の土曜日に韓国から4人の見学の方たちが
お見えになりました。下手くそな通訳が1人入っていた
ので、本当にそういつたのかどうなのか、よく分からな
いんですけども、「何で来たの」といったら、韓国に
は財閥系企業グループで現代グループというのがあり
ます。その現代グループから「日本に行つて、安井潤一
郎に会えといわれて来ました」というんです。「ええ、
知らねえな」「現代グループでどなたか安井さんはお知
り合いの方がいるんですか」と聞かれたから、「知り合
いの韓国人は焼き肉屋しかいないよ」といった。(笑)

先週の土曜日は、ペテルスブルグ第5テレビ局とい
うのが取材に来ました。昔のレニングラードというところ
のテレビ局らしいです。これが来る前に、うちの商店会
の副会長の会計のところに、外務省大臣官房国際広報課
長新美何とかさんという人の、「ペテルスブルグ第5テ
レビ局の取材に対し、格段のご配慮をお願い申し上げます」
“なんていうでつかい判このついた紙がきちやっ
た。何だかよくわからなくなっちゃったな。何で韓国が来る
んだ。何でロシアが来るんだ。でも、「商店会の副会長の
の会計、おまえのところに来たんですから、おまえが対
応しろ」といったら、「そんな」とかいって、直前にな
って、やつは不動産屋なので、「契約が入ったので、安
井さん、頼みます」と、こつちに振られてしまった。(笑)
インタビュー受けて、「この空き缶回収機、見ましたか」
「この空き缶回収機に、ロシアからも何かサービスを入
れたらどうですか」「キャビアが好きだ」。もしかしたら
ロシアのおっちょこちょいのやつがキャビアを送って
くるかもしれないと思ってるんです。そんな形でど
んどん広がろうとしています。
あちこち話が行つて申しわけないんですが、直近の話
をさせていただきます。来週月曜日、6月28日、早稲田

の町で全国リサイクル商店街サミットというのを開催
します。夕方4時から商店街のエコステーションを見学
して、4時半から地元の東京三協信用金庫の3階のホー
ルで2時間のサミットを行うという事です。
こういうと格好いいですけども、実はこの出だしは
28日に小樽の商店会長が東京で講演をする。ついでに前
の日に東京に行くんだけど、「安井さん、夕方、会えな
いか」という電話があった。「いいよ。28日の月曜日だ
つたら、空いているから飯でも食おう」といった。で、
小樽の商店会長が来る。でも、せっかく小樽から来るの
に2人だけで飯食ってるんじゃないかな。みんなも呼ば
うぜという話をした。「みんなって、だれ」「口
先ばかりで環境とか、リサイクルといっている商店
会長がいろいろいるじゃないか」「ああ、いろいろ、じ
や、みんなに声かけよう」といったら、みんな来ると
いうことになっちゃった。

九州熊本、佐賀の多久、四国からは新居浜と高知と高
松といつてました。兵庫県から神戸と三田。滋賀県から
は彦根。隣の神奈川県からは神奈川県庁とブレメンが
来る。東京からは私のところと神楽坂と下高井戸。埼玉
からは戸田と入間。長野県の大町。群馬高崎のJ.C。み
んなぞろぞろ集まっちゃった。とんでもないことになっ
ちやつたなと思つて、こいつらに東京で安井と1杯飲もう
というんじゃないや、商店会も交通費を出しづらだろう
というので、全国リサイクル商店街サミットと後から名前
をつけてやつた。こんなことをやるよと通産省にいつたら
通産省のリサイクル推進課長が同席させてくださった
といつてきた。通産省だけじゃ、片手落ちになるので、
厚生省にいつたら、厚生省のリサイクル推進室長も「私
も出ます」。東京都の労働経済局の部長さんが「私出ま
す。産業政策担当部長も来ます」というんです。とんで
もないことになっちゃつたなと思つていたら、NHKの
BSが取材に入りた。NHKのBSが入るといつたら
ニューステーションが来るという。「あらあら」要す
るに世の中何が起るかわからないということ。
我々は行動の伴わない議論は時間のむだといつて
いる。行動という字は行く動くと書く。行く、動くとい
うのは、何かといつたら、物の見る視点。視点が変わる
のは、何かといつたら、物が見えないこと、わからない
動く前に話をして見えないこと、わからない
ことを話をして見えないこと、最後の結論が今までど
おりになることが多いということを、皆さんもよく覚えて
おいた方がいいです。この会議をやっているが、「や
つてみなきゃわからない」というこの一言をどこでだ
れが言えるかです。しかし、「やつてみなきゃわからない」
という言葉は、行政でも企業でもなかなかない。こ
れが言えるのは何か。我々町だから、いえる。自分た
ちの活動は行政の仕事でも市民運動でもないんです。我
々はこの町に住んでいるから、我々の活動は生活なんです
生活だから、無理なことはしない。生活だから、むだ
なことはしても無理なことはしない。できることだけを
やるよといつて。しかし、できることは広がる。この
広がることから元気と活力が出てくると我々は学習
したわけです。

これから先、町はどどんおもしろく変わっていくこ
うとしております。劇的に変わるのには小学生とい
まはPTAの会長になるときに、学校なんてのは先生に
任せておけばいいんだといいました。でも、これは先生
に全幅の信頼を置いて、学校に任せておけばいい、先生

に任せておけばいいといつたんではないということ、
後になって私は気がついた。町と学校と地域、この3つ
が一体とならなければ、今の子供たちを安全に真っ直ぐ
育てることは無理だ。だつて、そうでしょう。私だつて、
学生時代、大学生になる前にたばこ吸つたり、酒飲んだ
りしました。しかし、あつちこつちで、変な覚醒剤を売
つたり、変なものを買つたりしてなかつたです。
我々の町の隣には歌舞伎町があるといいました。歌舞
伎町と我々の間に何があると思います。新大久保とい
うところがあるんです。今から7年前、私がPTAの会長
だつたときに、この大久保小学校のPTAの会長は頭抱
えてました。なぜか。あの新大久保の裏通りに外人売
春がいつばいい。このお茶引いた外人売春が中学生を
つかまえて「坊やなら3000円でいいよ」といつたんです。
小学校のPTAの会長は頭抱えました。だつて、6年
つたら、今いる子供たち、全員中学以上になるんです。
小学生はまだしも、中学、高校生、男の子にとつての性
欲というのは食欲以上だといわれています。この子たち
に「坊やだつたら、3000円でいいよ」なんていう町を
つくつちやつて。自分たちの町ではそれをつくらせな
いといふ形の中からスタートしていかなきやいけない
んじゃないですか。

その新大久保が随分変わつてきて、新大久保からは
き出された外人売春がどこへ行つたか。池袋に行きまし
た。池袋はそれで大変困つて、池袋の商店会の若手の連
中が、もう何年も前になりますが、暮れに町の角々にテ
ントを張つて、たき火をして、外人売春追放、そういう
部分の客が行きづらくなる形にした。その外人売春が
それからどこへ流れたか。上野に流れた。こういう話を
していきますと、大もとのところがやらなからだと、
よく識者はいわれる。くさいものはふただといふ言
までされる。

でも、私はこれでいいと思つている。なぜか。自分
たちの町を自分たちで守るという意識を日本中で持つ
て、こういう状況にはならないということ。自分たちの
町、そんなものでもいいと思つているところはつぶ
れて消えるんです。
建設省の役人が話をしているのを聞いて、東京都の役
人は、東京都と北海道と違うんですよという。でも、東
京都の役人の話を聞いて、新宿区の役人さんは、「新宿
と杉並区違うんですよ」という。でも、新宿区どこで
も一緒だと思つている。四谷と早稲田は違う。歌舞伎
町と落合、違うんですよ。早稲田の中でも向こうとこ
ちが違う。行政のいう公平と平等というのはみんな一緒
という意味なんです。みんな一緒という意味は、我々の公
平と平等の中にはないんです。我々にとつての公平と平
等というものは、公平なルールのもとに平等に競争に参
加する権利があること、これを我々は公平と平等だと思
っています。
でも、行政は税の公平化ということですから、こんな
ことはいえない。しかし、行政の方たちは、私たちの口
を通してそれをいやすことはできるんです。自分たちの
できることをやりなさい。自分たちのできることをや
ろうといふことに最後はなつていくんじゃないかと思
います。
好き勝手な話をさせていただきます、大変申しわけ
ありません。ここまでさせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。(拍手)

フリーデイスカッション

司会(谷口)

廃棄物ゼロの話からまちづくりまで、いろいろな話をし
ただき、まちづくりの主役はだれかなど、いろいろ考えさせ
られる点がたくさんあったかと思つます。
いつものように、ご質問、ご意見をうけたまわります。ご質
問のある方は挙手をお願いいたします。
南(人権ネットワーク東京代表)

薬王寺に住んでおります南定四郎と申します。きょうここへ
来ましたという、私どもの町内会の役員から、おまえ、行つて探
つてこいというのでした。なぜかというら、早稲田は環境
環境といつていけるけれども、薬王寺というのは環境では元祖な
んだ。光化学スモッグでなんにも大騒ぎになったから、早稲田
が環境であんなに町がよくなるんだつたら、我々だつてよくな
るはずなんだから、おまえ行つてちゃんと聞いてこいとい
うことだつたのです。それで話を聞いて、大変参考になりました。
1つだけ、ご質問したいことがあります。お話の最初のとこ
ろで、商店会長になるには、PTA会長云々というお話があ
りました。やる気のある人がいても、それなりの資格がなければ
その役目につくことはできない。したがつて、その意思決定の
場に参加することはできないというお話しを頂き、その後、事
業委員会をつくつたというお話です。

私どもの地域で同じようなことを私がもし提案したとす
ると、必ず否決されます。簡単には事業委員会というのはでき
ない。早稲田の町で簡単に事業委員会できたのは、商店会長
さんのツルの一声でできたか。あるいは、それについて何らか
の手だてがあつたのか。その辺をお聞きしたいと思います。
安井

私の前の商店会長は2人で30年やつていました。同い年の
商店会長さんなんですが、このお2方が30年間やつていま
した。「自分たちがどんなに頑張つたつて、町が動かなかつた。
もう自分たちも30になった。そろそろ安井、かわれ」とい
うことになった。かわるときは、ご自分のブレイン、お仲間が全
部一緒にやめました。「それはあんまりだ」といつたら、「相談
役とか班長という立場では残るが、正副会長はすべて安井が決
めなさい。そのかわり正副会長で決まったことはどんなこと
があつて、絶対ノーとはいわれない」という確約をいただきま
した。

だから、正直いって、私はベテランの方たちに育てられたん
です。この方たちの懐が深かつたんです。ただ、私はこのベ
テランの方たちに申し上げました。会合は同席していただきま
すけれども、この方たちに1つだけお願いした。「心配しな
いくれ」といつた。ベテランの人たちの心配は若手のやる気
をなげかせてしまう。ベテランの方たちは、心配する気持ち、本
当に気がたい気持ちで心配事をお話ししたくんだらうけ
れども、決して心配しないうくれ。ベテランの心配は、往々に
して「あのとき、そういつたらう」となつてしまう可能性が
ある。ですから、ベテランの方たちのアライバづくりのための心
配ならば、やめてもらいたい。もつといつたら、商店会がど
んなことをやつたつて、大したミスはしません。商店会でも町会
でも赤字を出したらチャンスですよ。若手の役員、飼殺しで
す。実は私が最初の30年のイベントのときに30万円の赤字を
出しました。最初のイベントですから、どういふふうになつて
いかかわらなかつたし、資金的な部分もわかりませんでした。
どのくらいかかるかわからない。結果として30万赤字を出
してしまいました。正副会長以下スタッフ5人が、町の中で一番のオ
ピニオンリーダーのころ、相談役さんのところに行つて「実
はこういう形です。30万の赤字を出してしまいました。トントンで
終わる予定だつたが、30万の赤字を出してしまいました。どうしようもない
んです。1人50万ずつ補てんします」といつたら、「何を考
えていたんです。それはあしき前例になる。やめなさい。何かあつた
ときに備蓄していたんだ。それを取り崩さない」といわれた。
「でも、先輩たちが當々として築いた商店会の資金を勝手に崩

しているんでしょか。緊急総会を開いた方が……」といった「安井、何をいつているんだ。そんなものは役員会の中で処理しない。役員会の中で処理できないんだったら、私がそれにい出す」といつてくれた。それで、最後に「ためようと思つてためてたんじやないんだよ。使い道がなかつたんだよ」と、ボンと人の方をたいた。正直いつて涙ぐみましたね。「ハアーツ」と。

でも、今考えるとやられたなと思ひました。我々5人の役員は飼い殺しです。一生やめられないうんですから。(笑)この相談役いんですよ。ちよつと私たちが生意気なことをいうと、「ところで、あの最初の赤は幾らだった」とかいうんです。もうないんです。商店会の備蓄を取り崩しているから、赤はない。でも、みんなの心の中にはあのときのスタッフ5人の名前と50万という金額はインプットされてますから。そのときに同じ間違いを2度しては笑われるけれども、最初のとき何かやろうといつたときに、みんなでたきつけてやるべきだとおもいますよ。

お答えになるかどうかわかりませんが、いわばツルの一声です。しかし、この一声の中には私の前の50年間の営々とした苦勞があつたのだと、私は感じています。

よくいわれるんです。薬王寺の方がおつしやるように、おれたちの方がもつと前からやつているとか、おまえたちよりもつとスマートにやつていると。この間など、豊島区の染井銀座商店会の商店会長といふ人な合で会つた。実は今うちのエコステーションでは月に3回、福祉の作業所で作つた商品を販売しているんです。それが日経新聞の夕刊にドーンと出て、また早稲田の商店会は立派なことをやつていっているというんですけれども、現実問題は、あそこが空いているから、だれかに貸してやつたらどうだといふだけの話なんです。福祉の作業所といふのが来てくれれば、きれいに使うだろうとか、もちろん家賃も何も要らないわけですから、貸すわけです。そうすると、すばらしいとみんなが褒める。

さつと韓国の人が出来たといひました。韓国の人々が現代グループかいつてくれ。とんでもないことになつちやつたな。「どうしてですか」といつたら、韓国ではエコタウン早稲田といふふうにはエコステーションが取り上げられている。「それは大きな間違いです。何にもしていません」。エコステーションに連れていつた。エコステーションの空き缶回収機とペットボトルの回収機をえらく気に入つてくれました。なおかつ、ついでこの間新しい機械「アドマリン」といつ機械を入れました。チケツトが出て、そのチケツトの中には中華屋さんのお食事の方にぎょうざ1皿サービスといふものも出ていふ。中華花月でぎょうざ1皿サービス。花月つてどこにあるんだといつたときに、こつち側にあるアドマリンといふ機械。水槽なんです。本物の熱帯魚が泳いでいる。熱帯魚の後ろ側がテレビ画面です。この熱帯魚の下に差し入れる口がありまして、バーコードがチケツトにつけてますから、これを読ませる。そうすると、中華花月の全景がパチンと写真で出て、オーナーの顔が出て、ぎょうざが出るんです。(笑)これを韓国人が見て、「これはすごい」といつていふ。

ちよつと運悪く、福祉の作業所、知的障害を持つた人たちの作業所の人たちがつくとつたものを売つていふ。韓国の人たち涙ぐまんなかに感激して、人の手をギョツと握つて、「あなたはずばらしい」なんて、世の中いふんなことが起こるもんだなと思つた。(笑)

ですから、染井銀座の商店会長が、こんなことをやつていふんだけれども、うちも実は前からやつていふのかいつてました。「どうしておまえのところだけ、そうやつて取り上げられるんだ」「そんなもの、わかつていふ。商店会長の器量の差だ」といつていふ。(笑)

んです。自販機なんてあつちよつちに置いてくれるんです。けんかもしてくれまして、こんなのが3万人もいふんで、困つたもんだなと思つていつた。それが、この活動では大変な力を發揮する。ですから、今度、薬王寺さんが、薬王寺でなければできないことつてできるんです。

きのうの午前中に大久保のところにある海城中学の先生から電話がかかつてきて、中学1、2、3年生のお勉強として、早稲田、いのちのまちづくり」といつのを取り上げたといふんです。ことし8月5日、うちは夏のイベントをやります。そのときに「じゃ、海城中学にテントを1つ提供しましよ。中学校の皆さんがうちの町をどうやつて料理してくれたか、どうやつて分析してくれたかを、ここで出したらどうですか」といつたら、「ぜひ、やらしてくれ」といつていふことでした。

もう1つ、建築会社の社長さんと別件で会ひました。「安井さん、幾ら頑張つたつて、産業廃棄物はなくならないよ」といつた。50年つとに家を建てていつるようじや、産業廃棄物なんてなくならないよ。今一般廃棄物の方に目がいつていつるけれども、その8倍産業廃棄物があつて、その大多数が建築廃材だよ」といつていふんです。「我々は今50年住宅を勉強していつるんだ」といつていふから、「だつたら、8月5日来いよ。テント1つ貸してやるから、その50年住宅をみんなに教えたら」といつたら、「ぜひ来る」といつていふ。

それから、もう1つ、大豆畑トラストといふのうちの商店会は取り組んでいつる。日本の食糧自給率は低い。ましてや大豆といふのは3%しかないようじや。日本で使う大豆、日本古来の食品、おしよゆとか納豆とか、おみそをつくる大豆、この食糧自給率は3%。残りの97%は海外から輸入されて、なおかつアメリカから入つてくる大豆は遺伝子組みかえ食品が混在していつて、安全、安心度にはいま一步といふのが日本消費者連盟から出ました。大豆畑トラストといふ運動がある。500円払つと、10坪の畑が自分のものになつて、そこでつくられる非遺伝子組みかえ完全無農薬の有機栽培の大豆があなたの手に届きますといふ大豆畑トラストです。

でも、大豆がそのまま自分の手元に来つたつて、困るわけです。じや、これを商店会でやろうといふことになりました。どうするかといふので、お豆腐です。私の町には手づくり豆腐屋さんがあつります。このお豆腐屋さんに大豆畑トラストで6キロの大豆がとれるようじや。6キロの大豆でできるお豆腐が年間50丁。お豆腐屋さんの手間賃が半分ですから、50丁として考える。年間50丁、月に2丁。毎月第1、第3水曜日はお豆腐の交換日とすればいい。「マイ豆腐作戦」と名づけました。マイ豆腐作戦で、400円払つて、年間50丁。天然にがり使用、国産大豆10%のお豆腐は1丁200円が平均なんです。といふことは24丁、4800円です。400円払つよりも一括4000円払つ方がお得ですよといふ大豆畑トラスト、マイ豆腐作戦。これを8月29日のイベントのときに、4000円の募集と同時に、大豆畑トラストの説明もするといふことで、今度の8月29日のイベントは盛りだくさんといふ形になつていつます。

実行委員会の中で、イベントをインターネットで同時中継しませんかといふ話が出ていつたんです。ビデオで撮つて、それを圧縮してインターネットのホームページに載せると、早稲田大学のホームページで受けてくれれば、早稲田大学のホームページをクリックすると、今早稲田でやつていつるイベントがリアルタイムで見れる。5秒間この動画ならばできるといふことです。商店会のおじさんたち、そんなことを聞いたつてわかつたんです。そのアイデアを出していつたのは、早稲田の高等学院、高校2年生です。附属の高校2年生が「こうやつていつるかいつて、こうやればこうなると思ふんですけど、どうでしょつか」といつて、商店会のおじさんたち、みんな顔を見合せて「何いつてんだ、こいつ」(笑)と思つていつたんですけれども、座つていつた若手の助教に、「先生、こんなこといつていつるよ、こいつは」といつたら、助教が「そのとおりでいついんです。それならできつます。そこまで考えていつるんだつたら、早稲田大学の回線をつつ8月29日に用意しておきましょ」といつていつた。

しの8月5日 午後の1時から早稲田大学のホームページをリリースしていつたくと、見れることになつるかも知れせん。まだまだ流動的ですけども、見れることになつるかも知れせん。まだまだ流動的ですけども、見れることになつるかも知れせん。まだまだ流動的ですけども、見れることになつるかも知れせん。

実は早稲田大学には100人の留学生がいつるんです。1年ごとです。このことは、「日本時間8月5日の午後の1時に早稲田大学のホームページをリリースしてください。あなたが1年間学んだ大学で今起つていつるイベントが見れますよ」とできるんです。これから来る留学生の人たちには「あなた方がこれから1年間学ぶ早稲田の大学で今やつていつるイベント、町の商人と一緒にやつていつるイベント、これから先あなた方はこの中に入れますよ」といつてもいいです。

このことは、この8月5日のときに、300人が海外から早稲田大学のホームページにアクセスしてイベントを中継していつて、懐かしがつてくれる。「ああ、あの大学はよかつたな」「ああ、これからこの大学で1年間できるんだな」といつていつれる。これが町を好きになつてもらうといふことだと我々は感じていつります。

伊藤(株式会社リョウワ)

きよは大変貴重なお話をありがとうございます。時間がいつないので、1つだけ、これから先のこの件で教えていつだきたいんですけれども、今世の中で中心市街地が確かに全国で寂れていつます。いふんな手法の中で、外国で十数年前からやつていつる方法で、通産省の主導でTMO、タウン・マネジメント・オーガニゼーションといふのがこれから脚光を浴びていつると思ふんです。その辺を成功させるといつて、多分先生のあれが非常に大きなウエイトになつていつるといつます。これからのことで申しわけないんですけれども、その辺の参考になるところを教えていつただけたらと思ひます。

安井

TMOの話も中心市街地活性化といふ形であると思ひます。ただ、我々は今後こうなるだろうとつて、ああなるだろうといつて活動を続けていつたわけじやないんです。自分たちのできるこつと、それを見ていつたら、これができる、あれができるという形の中から出たと思ふんです。ですから、私のきよはようお話しさせていつただけのこと、皆さんがお考えになつていつることと果たしてジャストフィットするかどうかについては私はよくわかりせん。ただ、早稲田の町ではこんなことをおもしろがつてやつていつるよといふことだけわかつていつたつて、なおかつ、町が動くキーワードは儲かることと楽しいことだといふことをわかつていつただけ。町をきれいにする、倫理観とか、責任感とか、精神論だけで町を動かし続けると、必ず挫折するよといふことだけわかつていつただければ私は進んでいつると思ふんです。

もう1点、飛騨高山、去年の暮れから何をいつい出したと思ひます。来者者、来てくれ人たちのメインターゲットに障害者を据えたいんです。100人に1人、1000人に1人、1万人に1人の人のために物事の箱を変えたり、仕組みを変えたり、絶対コストに合わない。しかし、人に優しくする、大切にするといふ思ひが実は次の100年のエキスパだといふことがわかり出したんです。

飛騨高山といふと、何が起つり始めたか。おじいさん、ちよつと足腰が悪い。でも観光客のメインターゲットに障害者を据えたら、自分の家から飛騨高山に行つて帰つて、おじいさんが全然苦勞しない。おじいさん1人では絶対行かないです。高松の孫が行く。高校生の孫とおじいさんだけで行かないです。高松のお父さん、お母さんが行く。実は障害者をメインターゲットに据えたら、観光客が増えつた。

そういう形の中のいふんな切り口があつて、おつしやられたTMOの中は1つじやないと思ひます。我々はミニ東京にした町は全部ガタガタになつていつるのを見ていつます。ローカルにローカルにローカルに徹するこつとで初めてグローバルに増えていつく。広がつていつくと思ひます。

何で福祉の町宣言をしたかといふと、郊外に大手量販店が出て、その反対運動で署名を集めたら、町に住んでいつる人たちはだれも署名に参加してくれなかつた。これで商店会長はショックを受けて、町に住んでいつる人たちにいつて必要だと思ひれる商店会をやろうといふたら、福祉の町宣言になつた。

目の自由な人たちがいつるから、ライトセンサーがあるといふのでやつていつたら、弱視といつていつるけれども、弱視の中には大きな字なら読める人と、光の強弱しかわからん、その人たちも含めて弱視だつた。景観を考えたと、街路灯なんかは全部町の中に沈み込むような色にしていつたけれども、実はオレンジと黄色でなければ見えないといふことがわかつた。盲導犬を連れて食事しようと思つたら、盲導犬はだめですといふわかれ追いつた。すこく寂しかったといふ話を聞いて、それを商店会に流したら、当然のように、盲導犬ウエルカムといふのをいつした。そうしたら、お客さんは増えつたんです。二俣川は福祉の町です。福祉の町宣言してお客さん増やいつる。うちは環境です。環境で修学旅行です。お中元セールとお歳暮セールしていつる町はみんなつぶれていつたんです。

要するに、切り口が全部違うといふことです。そのあたりをよくごらんになつていつますが、人をどうやつて生かしていつるか、それは実は人なんです。人をどうやつて生かしていつるか、人をどうやつて元気にさせていつるかといふことに尽きることだと思ひます。中心市街地の活性化、やる気のないこつとに幾ら中心市街地の活性化をやつたつて、そんなものはどぶに捨てるだけです。やらない方がいつです。やつていつるといつ、1つの成功事例をつつて、そこをみんなに見せて、ああなりたいたいと思ひせることです。

さつきの薬王寺の方がいつわれたように、自分が何か出しても、旧来の会長たちが全部つぶしていつく。つぶしていつた会長たちが、後になつて町の中で縛り首になるぐらいの町になつていつくような気がいつます。縛り首といふと大げさですが。

でも、よく考えてください。我々は自分たちで動こうといふのでいつす。皆さんが暮らしていつくのに安心、安全、私がつりまふ。皆さん、私を支持してくださいといふ人が出つたら、もつと怖い世の中になつるんです。ナチスがそうだつたじやないですか。あのナチスといふ組織はアウトバーンで、失業率を低下させて、人の気持ちを引きつたんです。

今、石原さんが、強いリーダーシップを持つていつるけれども、今の石原さんはまだまだ安心。でも、もつと変わった人が出てきて、ヒステリックな話を始めたら、私を含めて、きよはお集まりの皆さんの大多数の人たちは戦争体験がないと思ひます。しかし、戦争体験を持つた人たちに育てられた年代です。でも、我々から下はどのようなんです。戦争体験を持つたこつともない親に育てられるんです。といふことは今自分たちが動き出すといふ思ひを持たない、次の世代をまた戦場に行かせるといふことになつてしまふんじやないかと我々はこの活動を通じて感じていつるこつとです。

商店会長が夏枯れ対策から戦争の問題まで話するなんて、これつぽつちも考えなかつた。それを長い時間おつき合いつたできまして、ありがとうございます。(拍手)

本日は大変ユニークな、また、面白いお話をいつえたとと思ひます。(拍手)

安井さん、どうもありがとうございます。これで終わります。(拍手)

引用終わり

「安井潤一郎のトップページにもどる」

「活動主体のページにもどる」

「トップページにもどる」

(c)1997-1999 RENET Web, All rights reserved